

豊混の創設および戦後の復興において重要な役割を果たされた井伊弘（1919～2002）さんは、大池小学校の教諭の傍ら、NHK 大阪放送合唱団や豊中市教育委員会の指導主事などの仕事に奔走される中、豊混の指揮者を続けることが困難になり、1955 年 12 月に辞任された。

そして、創立以来、豊混は関学グリーとの繋がりが深かったため、第 4 代指揮者として松浦周吉さん（1930～2019、関学グリー出身、大和銀行合唱団の育ての親）が就任されている。松浦さんの回想によると、当時の豊混の団員であった関学グリーの後輩から指揮を依頼されたとのことである。

1955 年は、翌年の経済企画庁発行の「経済白書」において“もはや戦後ではない”と謳われたように日本が戦後の復興期を終え、神武景気から岩戸景気へと続く高度経済成長を始めた年である。

松浦さんは、当時、大和銀行に勤務しておられ、日本経済の急成長のあおりを受け、過酷なまでの激務であったため、一旦は豊混の指揮者に就任されたものの、結局、長続きはせず、翌 1956 年に辞任、そしてやはり関学グリー出身の中西さんが第 5 代指揮者に就任された。当時の団員は 4 名程度であり、関学グリーの大人数に比して衝撃を受けたとの回想を残しておられる。しかし、その後、新人勧誘活動が功を奏し、徐々に団員は増加していく。

なお、1957 年には第 1 回「豊中市合唱の夕べ」が開催、1958 年には「豊中市合唱協会」が設立、1960 年には第 1 回「豊中市合唱祭」が開催され、それらは今日まで続いていることは言うまでもない。

1959 年には、これまでの不定期の会報をやめ、月刊団誌「ひびき」が創刊されている。編集局がおかれ、本格的なスタイルと内容を持つ機関誌に変身した。

ちなみに、当時はコピー機などなく、すべてガリ版印刷であった。もちろん楽譜も出版譜以外はガリ版刷り。まず五線をひいて、音符と歌詞を一つずつ切っていくという、気の遠くなる作業であり、1966 年から 1972 年まで豊混の団長を務められた新田義邦さん（早稲田グリーで須賀先生と同期）の回想によると、「楽譜担当が深夜、時には夜明けまでかかったガリ原稿を、練習に間に合わせるべく一生懸命、謄写版で、時に手を黒くしながら刷っている姿を見る時、胸が熱くなる思いであった」と書いておられる。



若い人のために、ガリ版印刷を説明しておく・・・和紙にパラフィン等を塗ったロウ原紙と呼ばれる原紙をやすりの上のにせ、「鉄筆」という先端が鉄でできたペンで文字や絵をかく（この作業を「原紙を切る」と言う）。その作業は「ガリガリ」という音がしたため、ガリ版の名前が付いた。書いた部分は紙のロウがけずれ落ちて細かい孔がたくさん開き、「透かし」となる。それを木枠に張り、原紙の上にインクを塗り、下に紙をおいて、上からローラーで押さえると、「透かし」部分の文字や絵の部分だけインクが通過し、印刷されるしくみである。この謄写版は、やがて輪転機の登場により、大量印刷工程は随分と楽になった。これらは後に青焼きと呼ばれる湿式複写機を経て、現在のような普通紙が使える乾式複写機（PPC）へとつながっていく。日本では、乾式複写機が普及を始めるのは 1970 年代に入ってから、10 円コピーが気軽に使えるようになるのは 1980 年代に入ってからである。

1956 年に指揮者に就任された中西さんの手により豊混は徐々に発展を始めるが、残念ながら 1961 年 4 月に中西さんが転勤となり、その結果、新たに第 6 代指揮者として寺本康郎さん（元六甲男声合唱団 [神戸大学グリー OB 合唱団] 指揮者、元姫路市民合唱団指揮者、住友銀行勤務）が就任された。

そして 11 月には毎日国際サロンにおいて、豊中混声合唱団「第 1 回定期演奏会」が開催されている。

プログラムは「ハウプトマンの Chorale 集」「シューマンの流浪の民」「フォーレのレクイエム」等であった。写真で見ると、女声 33 名、男声 19 名、総勢 52 名という大規模合唱団である。男声の中には、詰め襟の学生服姿が 3 人見える。



1961年11月18日  
第1回定期演奏会  
毎日国際サロン  
指揮：寺本康郎  
ピアノ：大北節子  
(後の宗倉夫人)

ところが就任したばかりの寺本さんも翌1962年に転勤となってしまふ。そしていよいよ第7代指揮者として須賀敬一先生(1931～)が登場することになる。須賀先生はこれ以降、2002年末に音楽監督を退かれ、名誉指揮者に就任されるまでの41年間に亘り、豊混を牽引し、日本を代表する合唱団へと育て上げられたのである。

第1代の樫本さんが1年、第2代の井伊さんが戦争を挟んで14年、第3代の岩尾さんが井伊さんと並行して3年、第4代の松浦さんが1年、第5代の中西さんが4年、第6代の寺本さんが2年という就任期間に比べると圧倒的な長さであり、文字通り、豊混の育ての親であることは疑う余地もない。

須賀先生は高知県のご出身で、早稲田大学第一理工学部に学ばれると同時に、早稲田大学グリーンクラブに所属して精力的に活動、学生指揮も務められた。卒業後は、大阪の老舗の建材販売・施工会社である久我産業(株)に就職され、サラリーマンとして勤務しながら、合唱の世界で偉大な業績をあげられた。その合唱人生の出発点となったのが、1962年の寺本さんの転勤に伴う豊混の指揮者就任であった。

卒業当時のエピソードがWikipediaに紹介されている。

『地縁のない大阪で就職するにあたり、合唱の道を封印し会社勤めに専念する決意をする。ところが口座を開設しようと初任給を持って銀行に赴くと、応対した行員は指揮者の松浦周吉であり、前年の東西四連(早稲田グリーン、慶應ワグネル、関学グリーン、同志社グリーン)の演奏会の話で盛り上がる。松浦との縁は深く、豊中混声合唱団の2代前の指揮者、大阪府合唱連盟理事長の前任はいずれも松浦である。』

須賀先生は松浦さんの1年後輩にあたり、同じ時期に四連を経験されたのであろう。本当に不思議な縁である。

さて、会社勤めに専念するつもりであった須賀先生も、やはり合唱への思いは断ち切れなかったのだろうか、1962年1月、奥様と共に豊混に入団された。当時31歳。そして、その7ヶ月後に寺本さんの転勤が決まる。当時のことを豊混60年史にこう記しておられる。

昭和37年8月の日曜日、1週間の長い出張から帰った私は服部緑地で野球の試合をしていた。2本の2塁打を放ったりしてご機嫌だった。ふと見ると豊混のマネージャー宗倉君がいる。試合終了を待って、「大変です。指揮者の寺本さんが転勤になりました。第2回定期はもう決まっているし、会場も予約しています。どうしましょう、とにかく、今から寺本さんのところへ行きましょう。」という。

出張のため直前の練習を休んだのではじめて事態を知ったのだが、1月に入団したばかり、合宿にも少し前、初めて参加しただけの新人はシャワーを浴びる時間も与えられず、そのまま門戸厄神の寺本宅に拉致された。

当初は、指揮よりも歌いたいとの理由で、指揮者就任は固辞されたようだが、結局、宗倉さん達から強く説得され、引き受けられたようである。当時の豊混は約40名程であり、音大卒のメンバーも多く、指揮も大変だったそうだが、“のんきで楽しい時代であった”と回想されている。

しかし実際は、指揮者に就任するや否や、早速、精力的な活動を開始されている。

まず、就任翌年の1963年6月、須賀先生が早稲田グリーン在籍当時の専任指揮者であった磯部倅さん(1917~1998)を豊混にお招きし、「グノーのミサ曲」を指導してもらっておられる。

磯部さんは、早稲田大学文学部を卒業、在学中から作曲を学び、1955年には、大中恩、中田喜直と共に、新しい子供の歌の創作活動「ろばの会」を結成し数々の賞を受賞、また合唱指揮者としても、当時、既に“合唱界の大スター”であった。磯部さんのご指導のエッセンス「尊敬しあって、聴きあって」の台詞が豊混に刻まれたとのことである。

また、1963年11月には高田三郎先生をお招きし、伝説となっている「わたしの願い」の苛烈なレッスンの洗礼を豊混は受けている。

「わたしの願い」は、1961年(昭和36年)度文化庁芸術祭参加作品として、NHKの委嘱により混声合唱版が作曲され、同年の芸術祭賞を受賞した。詩は高野喜久雄、そして作曲は高田先生である。放送初演は、合唱=東京混声合唱団、指揮=田中信昭であった。

事の始まりは、須賀先生がこの曲の初演の放送を聴き、とても感動され、豊混でとりあげられたことである。そして、良い演奏をするために高田先生の住所を調べてお手紙を出されたところ、思いがけずお返事があり、それがその後の交流の端緒となった。さらに10月にお手紙が届き、「九州での仕事の帰りに練習を見てあげてもよい」とのお話があり、いよいよ高田先生が豊混に指導に来られることになったのである。

高田先生と豊混は、もちろん初対面であったが、それは壮絶な厳しいレッスンであったそうである。その時の様子を須賀先生はこのように書いておられる。

(高田先生は)少し時間があるので、高槻のお弟子さんの家に立ち寄られた。時間を決め、あらためてお迎えにあがることとした。豊混の練習、集合時間のルーズさは当時もいまもさして変わりない。団長とマネージャーは少し時間をずらしてお迎えに行こうとたくらんだ。これがことの始まりだ。二人が約束の時間に遅れて伺うと、先生はすでに門の前に出てジリジリしながら待っておられる。烈火のごとき叱正が最初に発せられた。その極限に近い緊張の中、合唱団の演奏は見る見る音楽の核心に向かって急上昇を続けていく。息をのむ。これがプロのレッスンか。初めて目にする本物のみのもつ音楽の厳しさ、高さ、深さ、大きさ、そして凄さ。その2週間のち、第3回定期演奏会の成功は言うまでもない。豊混が高田作品を追い求めていく最初の出会いである。

高田先生の厳しいレッスンを知る私は、まだ入団前のことではあるが、この文章を読むだけで血の気がひくほどの緊張に襲われる。ほんとうに厳しい方であった。怖かった。しかし、須賀先生の文章にあるように、偉大な巨人であった。高田先生-須賀先生-豊混の宿命的な歩みの歴史は、今後の稿において、何度も登場することになる。

なお、先の文章に出てきた1963年11月の第3回定期演奏会では、すべて須賀先生の指揮により、「グノーのミサ曲」「童謡」「黒人霊歌」「わたしの願い」が演奏されている。会場は朝日生命ホールであった。

さて、豊混の団則第3条(目的)には“この合唱団は、常に心からの音楽を求め、合唱音楽の高みを追求するとともに、日本における合唱音楽文化の向上、合唱音楽による平和の創造への貢献、日本に優れた合唱音楽を創造し後世に残すという崇高な目的のために活動する”とある。

ここで言われている「心からの音楽」とは、かつて「心からの歌」と謳われていた言葉とほぼ同義で

あるが、この「心からの歌」という言葉は、第3回定演のプログラムにおいて、須賀先生が書かれた「わたしの願い」の曲目解説の中に登場する。それは高田先生の鮮烈なレッスンを経て形成された意志、思想であると思われるが、先の新田団長は、その意味を次のように記しておられる。

(前略) それは声楽的な美しさや音程やハーモニーと言ったものを越えた自分たちの心のあふれる思いを歌うことでなければならない (中略) だが高田先生と接する事により、「心からの歌」というのは単なる感覚的な感動ではなく、もっと深いもの、気高きものを求め、それに対する憧れ、悩み、反省をもって自分を見つめ、その内省的な心の高まりが本当の歌になると教えられた。

これについて後年、私が高田先生のレッスンを受けて強く印象に残っている話がある。それは“一生懸命に荷車を引いている人がいる、しかしその荷車の荷台には何も乗っていない”という話しである。これは私たちの音楽活動に対する比喩であるが、日本の合唱界では、このような光景に出逢うことは決して少なくない。豊混はそうなるなよ！という叱咤激励であったが、今でも胸に深く刻まれている。

また誤解されやすいが、“心をこめて”、“感情をこめて”、“情熱的に”、というような単純なものでも決してない。感情という一次的な精神活動を出発点として、それを思索、思考、自らの人生への問い、哲学へという高次の精神領域へと深化させ、高めていくプロセス、意志が重要なのである。

さらに誤解を招かないために追加するなら、これは決して合唱の技術を疎かにしてよい、という話しでも決してない。合唱は“言葉”と“音”から成り立っている。正しい音程とハーモニー、曲に適合した発声、言葉を伝える技術などが伴ってはじめて、曲の核心が鮮明に描き出され、歌い手と聴き手の双方に「心からの歌」が現出するのである。

こうして、須賀先生は、日本人が作曲した日本語の合唱曲、いわゆる邦人曲を合唱団の支柱とされた。

昔、私は、須賀先生が理学部の数学専攻であるという話しが信じられなかった。膨大な文学への造詣、言葉への感受性、その引出しの多さ。練習中に、しょっちゅう詩や短歌を暗唱された。

言うまでもなく、言葉は単なる記号ではなく、特に文学作品においては、その国の歴史・風土・文化を担っている。したがって、私たちが「心からの歌」を求めるための最善の選択は“日本語を歌う”ということである。(同様に諸外国においても、その国の言語を歌うということである)

こうして、当時、関西では外国語作品を歌うことが圧倒的に主流の中、豊混は日本語を中心に歌う合唱団として希有な存在であった。それは日本語文学への造詣が深い須賀先生だからこそ、可能であり、実現できたことだと思う。

こうして、第5回から第12回までの定演は、全ステージが邦人作品で構成され、“関西に新しい風を吹き起こした”と言われるようになったと新田団長は回想されている。

こうして「心からの歌」は、豊混の在り方を示す言葉として50年以上に亘り継承されてきている。

なお先の団則にある「心からの音楽」以降の後段のくだりについては、今後の稿に譲る。

なお、1963年には大阪府合唱連盟が設立されている。初代の理事長には関西の雄の一角である「グリーンエコー」などを指揮しておられた加藤直四郎さんが就任されている。

翌1964年、日本は東京オリンピックに沸き、東京大改造が行われ、東京モノレールや新幹線が開業し、まさに高度経済成長を謳歌していた。そして豊混もまた躍進の時代を迎えることになる。

～次回に続く～